

ほほえみ 第41号



新年度の4月を迎え、また、陽気も春めいて来ましたが、ほほえみ読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか。盛岡にも春が一足飛びで訪れてきたようです。西日本での桜の便りを聞くと、実際には桜の開花が未だでも、心が浮き立つ気持ちが致します。がん化学療法科はスタッフの変動はありませんが、院内では異動もありましたし、新しい気持ちで治療に取り組んでまいりたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。

診察室の模様替え（稲造ルーム）

がん化学療法科の診察室①を模様替えしました。従来の診察室の要素を全て取り払うことも考えていたのですが、今回は予算的にも難しかったので既存の机や椅子を使う形でマイナー・チェンジです。入り口に新渡戸稲造先生の写真を飾らせていただいています。視線や距離感を重視しています。また、スチール机やシャーカステン(X線フィルムを見るための装置)などを外し、絵や写真、テーブルクロスや木製の収納棚などを使ってみました。窓のない部屋なので、風景画があればと思っていましたが、丁度、岩手山を題材にした風景画が見つかったので懸けてみました。当院の病棟からは、非常に綺麗に岩手山が望めますが、外来からは残念ながら見えませんでした。今は絵を見て、時折、目を休めています。

今回の模様替えは、化学療法を行うこと自体には直接関係ありませんが、現在、取り組んでいる「がん哲学外来」の活動にも一脈通じるものがあります。がんの化学療法は、新規薬剤の導入など常に進化を先取りする領域です。そして、大多数の日本の腫瘍内科医は、化学療法の目的は生存期間の延長であると答えます。臨床試験の主要評価項目が生存期間の延長であるからですが、このことに疑いをもつ者は少数だと思います。

古代の哲学者・アリストテレスは、目的と、目的のための手段となるものでは、目的となるもののほうに価値があるといっています。たとえば、富と幸福では、富は目的にもなりうるが、幸福を得るための手段であると考えれば、幸福よりは劣ったものであると考えられます。同じように、生存期間の延長は、そのものが目的にもなり得ますが、より良い人生、人格の完成といったものための手段であるとも考えられます。

がん哲学外来の考え方や、英国のマギー・センターの考え方では、医療はもっと人間的であって良い。病気であっても、人生の目的を定めることができるはずだ、「病気であっても、病人ではない」という立場に立っています。こう考えてくると、人間同士の対話の場が、そして、そのための環境が必要であるということになりますね。勿論、環境だけでは根本的な解決にはなりません。日本の医療には、非常に、こういった視点が欠けており、万事、実用的、合理的です。

お茶を飲みに行っちゃう方があれば、お茶をお出しできる、そして、実際に、ちょっと寛いでお茶が飲めるという環境を目指して模様替えを行いました。理想には、まだ程遠いのですが、第一歩は踏み出せたかな、と感じています。

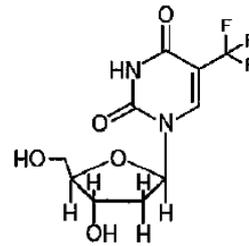


ロンサーフ®錠に関して

2014年3月24日に、標準治療に抵抗性の進行再発結腸直腸癌に対して、ロンサーフ®錠が製造販売承認されました。この薬剤は、5FUと同じく代謝拮抗剤に分類される薬剤ですが、一般名をトリフルリジン・チピラシル塩酸塩配合錠といて、抗がん剤と効果を増強させる薬剤の合剤になっており、世界に先駆けて日本発で承認されるものです。

承認後の流れとしては、薬価収載されたのち、世の中に流通されるようになりますが、恐らく市販後調査の対象となると思われますので、これまでの他の薬剤の経緯から考えると、実際に使われるようになるのには、一定の時間が必要になると考えられます。

内服の薬剤ですが、骨髄抑制といて、白血球数や血小板数が下がりやすい特徴があるようです。今後、具体的な使用可能時期などがわかれば、追加でお知らせしたいと存じます。



STAP細胞その後

ほほえみ2月号で、STAP細胞を取り上げていたのですが、その後の報道では日本人研究者の歴史的快挙というより、研究の不備の指摘も多く取り上げられていますね。世界的に権威の高い『Nature』誌での発表であっただけに、反動も大きく、過去の研究に遡って報道されたり、科学的な検証が行われなまま、興味本位な報道が多いように思います。しかし、実際に研究の詰めが甘い部分は認めないようで、STAP細胞が効率は低くとも存在するのかなど正確な結論を出していただきたいと思います。どうも最近の報道は、オリンピックの際にもそうでしたが、憶測の部分が多くて、かえって当事者を傷つけている気がします。

『衣服哲学』 原題：サーター・リサータス

新渡戸稲造が大学時代に人生に悩んでいたときに、読んだ本です。方々手を尽くして書店では手に入らず、個人的に譲ってもらって、恐らく日本人として最初に読むこととなった本です。トーマス・カーライルの自伝的作品であり、悩める新渡戸に光明を与えた本となりました。新渡戸は『衣服哲学講義』という本も出しています(全集の中に入っています)。

『衣服哲学』は絶版ですが、衣服というものの概念を借りながら、人間社会の記号性にいち早く気づき、警鐘を鳴らした作品だと思います。先日、フェルディナンド・ソシュールについて読んでいたのですが、記号論の考え方は、正にカーライルに源流があると思ったり、先見性に驚かされました。新渡戸稲造はこの本(もちろん原書)を何十回も読み返し、何度も本がボロボロになってしまい、買い替えたようですが、今は絶版でもインターネットで、古本ならいくらでも見つけることができます。この本が読まれなくなったのは残念ですが、インターネット社会とは、文化的であり、文化的でないような気がしますね。



トーマス・カーライル
(Wikipediaより引用)

MEMO

4月のがん化学療法科の予定

4月11日	柴田教授外来
4月18日	新渡戸稲造記念メディカル・カフェ(予定)
4月25日	柴田教授外来
4月29日	昭和の日

3月は盛岡地区のインフルエンザの流行が警戒域を超えたため、急きよメディカル・カフェを中止と致しました。参加の予定をされていた方々には、誠に申し訳ありませんでした。



今年の盛岡での桜の開花予想は4月19日のようです。